



湖海文集

湖海文集

四十四

湖海集

36

5
1139
36



1139
36



Vertical calligraphic characters in black ink, likely a title or name.

Vertical calligraphic characters in black ink, possibly a signature or date.

Vertical calligraphic characters in black ink, including a stylized seal or mark at the bottom.

芝草深き子

芝草深き子



月崎集

元亥居士

本より世の今や殊のまつわし
居思りの空を包んでけり
子らのとせぬよそれさ
けりいそ海まハ水明あ
出たりよけりいそ
こころやま掃杯のこころ

殺生石

山のふもとに湧泉のふもとに流るる水

白川 冥

少くも春の種先小見えてくるる

高の松系

数りぬ嶽人ありや松の風

月夜

元亥

中へ秋をききてるる水は流るる

はらへんふもとに流るる水

稜石のつらき水は流るる

音のつらき水は流るる

曳傍ふと春原へと土を根

この口へとふもとに流るる水

山 亥 山 亥 山 亥

夕立のくらしやいそぎて一巻きり

賽めかすてふかく舞はる橋

橋けりまや七空せのくらし借ふ

言れくらしきこ一方のゆめ

深瀬ハ何の思われも極りて

此の碇ハ安んよなり

月と日の空ふらふ舟の船 啼く

子橋も吹橋もかりてなす

山

山

山

山

山

山

山

山

木く花ハ入習習よひまのり

後れ、午刻の板橋く

かき花まよひ空の喧嘩あつて

つんきりてま川あつ

うやう添ふ以売舞う花のけ

くく小さあかりふり

山

山

山

山

山

山

瓢箪よあめそら具

そらい音の子多てサツクク

汗あせやあせくあせまあせきあせ月代

賣うのの小こ未みとと程ほどすす前まへをを切きたためめて

ぬぬくくわわ極ごくよよののままんん屋やくく

ああららちちのの高たかななとと澄すみみみのの茶

山やまのの笑わらひひののくくつつ入い湖

葉は由ゆ

元もと亥え

由ゆ亥え

亥え由ゆ

亥え由ゆ

ちち切きやや鳴なままああーーちち鳴なままーー

いいつつもも持も人ひとささままううちちいいちち

音ねのの来きるる勢せいももあありり美み林りん

川かわ西にし海かいふふ勢せいいいかかくく美み葉は菜さいいいれ

是こゝ賣うのの花はなのの心こゝろももややゆゆりりののまま

いいちちくくゆゆああいいささううぬぬ初はつふふふふ

ひひままいいののとと疾はやききふふずず以もてて醒さたたままい

初はつままらら藤ふじもも尾おろろるるりりあありりいいちち

西にし条じょう池ち

芥か舎しゃ

九く起き

大だい坂ばん弟てい

稻い交こう

素す屋や

菊きく也や

漸ぜん水すい

田の中を人の行きくまの松
 葉朗
 水明しの流るる流るる
 藍弓
 行はるる都のまきまきの
 仙杖
 夜は月あへおきて起る福き
 峰雲
 うけまきの下まきまき
 有方
 阿とまきを流るるや
 保彦
 まきのまきの音流るる
 一及
 梅は月他まきのまきの
 紫玉

白たれまきのまきの
 好く
 まきのまきのまきの
 山名
 まきのまきのまきの
 桂紫
 枕まきのまきのまきの
 桂司
 まきのまきのまきの
 橙司
 まきのまきのまきの
 里月
 まきのまきのまきの
 靨林
 まきのまきのまきの
 厚明

青より白くも 白くも青くも 子の手
 直きよりまれきて ありる合の意 獨 芳
 田も畑も 是くも 是くも 月元 雨 氏
 新文のち 解くや 苗代 田 柳 就
 ちりのち 人のかや 枝を 合 柳 系
 秋を 是くも 是くも 短く 是くも 梅 電
 清くも 是くも 送くも 是くも 月 峰
 秋の 是くも 是くも 中より 豊 彦

此のちの 風も 秋の せき 春の 岫
 ちりたりや たる 音は 鳴つれ 水 溪
 ありや 秋の 鳴き 波の 具 心
 水何や 命を 先の 中より 聲 林
 ちり 秋の 白くも 畑の 夕なり 寄 一
 ちり 秋の 白くも 梅の ちり 志 静
 秋の 白くも 白くも 白くも 眉 山
 秋の 白くも 白くも 白くも 京 又

秋と云ふことの趣や雪よと世一
 秋の白や雪をまじりて他山
 之傳と云かりしや本権垣
 迷ひなきる一巻しや雪中山
 子かきんて松子ぬきわを小松砧
 雪の兼つて友よゆつり
 らかきぬふ梅ちる夕ア、の如
 雪ふりもまじりて紅の、扇、うん
 貞山

地

沿るや紅ののふいぬの
 紅の白や雪をまじりて
 雪の兼つて友よゆつり
 らかきぬふ梅ちる夕ア、の如
 雪ふりもまじりて紅の、扇、うん
 貞山

正 柯
 飛 空
 麦 山
 舞 志
 柳 小
 性 一
 西 是
 池 極

皮ふふをそめて袖の青きうん
 子音啼ねや以短尺星のうす
 只居ても淋しきものを柱のうん
 衣をいふはさるるすその名やうん
 横よりのさるるやさるるのうん
 廣系や柱にさるるのうん
 里ふの型をのひらきし後うん
 船へ行つねはうん月をうん

人 積 素 紫 魯 枝 菴 梅
 枝 月 石 白 窠 枝

破れ垣を渡り月神より
 星の糸を垂れし風ふゆり
 手探るれを哀しやうん
 阿ちまかふはるる板のうん
 と合を哀しきうん
 是れはうん
 相ふくも光淋しや秋のうん
 柵し糸よ伸る岸の柵うん

一 一 一 一 一 一 一
 芝 筈 尾 岩 庭 山 晴 風 任 風 牛 山

子に人かゝるをよみたるはまゝのこゝろ
 下り際よむふかきくやの夕
 明くくふふらと秋空のまゝの火
 土橋より枝の伸るる秋のうら
 志くくやふいそきて手のうら
 丹精をそふ歌もは青白のうら
 戸を多て志をくくぼや白のうら
 上とるぬらに安き路中うら

是 兄
 松 舎
 米 水
 茂 樹
 春 松
 森 山
 赤 堂
 一 行

山の中のこゝろやまを去るは垣の介
 新川をこゆく明の秋のうら
 空のぬれぬらりくくそはのうら
 出るくくこれに安き路中うら

山 一 壱
 月 一 人

山の中のこゝろは海の廣きも
 月よのこゝろのままやふき芳のうら
 〇

長廿九

画の休も静きさうり秋の冬
 音の街を住ぬくやうる
 黄多やり小くみき考のま
 皆よのふり志し福もきくの
 年栞やみく舟小松系
 名月や栞てこれり汝きり
 灯とすや破り家とおも
 火の出来と家いままや高時

楳山
 是曉
 五澄
 程重
 雀兒
 洒年
 又交
 甫曉

教ふふとい木の透尼とぬ松系
 福舟と担て居るまきめ
 ちり一りなま下高内やまな
 言傳て居るまきと高のり
 らんこのぬれし栞るや時
 ころくや野一の喜まき定
 泊り所の尼とて嬉しき時
 まらやらぬるおまきり春

葉叟
 龜友
 栞青
 貞壽
 山好
 壽考
 万壽良
 是江

正月に喰ふておる旨のそりり
 西の河を枯し居るの常り
 是より身をよみぬるおるの
 行尸を足送る空をさり
 跡夢の河を是所の一本松
 二葉よりよきをさり
 数よりも重き松の木のさり
 新ふきのさりよきをさり

玉
 周
 水
 遊
 志
 角
 如
 井
 社

白不ぬて居るのちりて夜の月
 夜よりんものやいえをり
 遠おりよきをさり
 道よきのそりぬるや
 西月や遊ふのちり用ら
 人志ぬる地を暖より枇杷の
 松風やがよきをさり
 月をよきをさり

蒼
 山
 清
 山
 休
 山
 松
 居
 喜
 山
 系
 遊
 和
 兆
 雪
 登

○

如月やおもひゆきをそらの色

平
亀 甲

なのおのちの中うらおうふこの山

又 海

ふ所又ききし卯月の松根をれ

芝 溪

伊豆やおの枝をそれぞうら

杏 高

もも松を越て呼そり松をうり

垣 山

音またるかふれ音おのたまの冬

那 丸

ちよやよき喜の名姓の赤帯

山 喜

春をよふそよふ忘れてふききた

和 崎

志ま石の上をかりやき喜の音

益 月

名のよむ音又げゆら庭をふりや

一 噴

むらやふ追れて月の名姓うら

一 泉

うき遠や根のうらものをとりぬん

浦 周

いよき走、松を およぶを 松のそら

洞 泉

松先のり松中きき 松のうら

松 溪

庭よりよそたしうら喜の一名ふりぬ

先 島

天

十五

初日の産草中んふきき
 ずむくちまうぬるむら
 明て夜よらの中まの時るうれ
 香をちつぬてま梅の屋
 夕月の封のまふめり相一葉
 松徒いぬまのいまの冬
 庭挿すふ月まのま宵うれ
 秋ま〜枝川のふるぬの波
 秀橋 浮海 露松 子屋 又板 悟 一華 南元

秋まや濱ハ万戸の朝ま
 網まのけマ書まのまま
 燈のおむ〜えりよ小春風
 夢少ん〜雪の音淋〜明の澄
 かつまのまぬ〜まのまの月
 朝の〜りまぬれぬまの白
 系うけとえまのまの月
 かまらま〜ぬ〜まのまのま
 月招 魁休 吾妙 留飛 和心 一瓢 是源 密丸

下

秋ハ神の道ふらり不古智 牛
 啼くらん方ハ行 衆の呼ぶ音 素氏
 後 葉がして赤らめらき 月夜ハ
 一 波し 志をハ 抑り、水の音 梅雪
 相一葉ニ葉ふ 秋を重ぬり 香石
 とき 秋をふくむ 浪を 枕う 梅香
 ちり 河をふ香の 流りきり 山さくら 若友
 春もや おて 冬 けり 小松

花の阿とるふ 夕子ハ 素牛
 心の香の 耳を 吾松
 畷一投うけて 冬人の 梅香
 風の子の 目ふハ 季衆
 葉よ葉を 流しを 枯陰
 いく人の 件くら 侃丘
 ありしを ふニ 高水
 一葉もて 流しから 梅林

柳の家の数よき〜〜 福、之 牛角
 之まき室に、雲秋の香のり
 葉か〜れよ一見、冬、梅、の、れ
 空、の、重、あ、ふ、い、や、そ、よ、月、の、り
 文、衣、の、て、裁、の、り、い、善、後、の、り
 只、浪、の、香、の、り、阿、の、り、時、の、り
 ま、ま、今、の、り、の、入、の、り、ふ、二、の、景
 日、と、お、の、り、の、り、は、お、の、り、ふ、巾、の、梅
 南、石、英、山、奇、山、水、光、韓、め、空、山、之、柳、牛、角

久々、方、マ、室、見、て、居、年、に、い、ひ、の、り、の、り
 ま、り、紅、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 美、美、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 揮、さ、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 糸、と、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 ま、や、里、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 足、を、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 志、し、遠、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り
 路、風、里、曉、後、月、山、花、香、長、香

年

梅を何ぞ 芥え 雪のまろめ川 係 幸
 月うけのやまふより 碓のれ まろ雄
 雷の遠くまろり 飯の月 まろく
 枯柳まのふのまろのまろり けい
 まろりのまろり 急つて 度かろ
 出まろりの 度ろり ぬまろり
 北と藤のりろり 卯月の旭 けい
 節のまろりの けいまろり けい
 葉香 葛后 松君 元幹 壽仙

おしまれと梅のちろり 月露中 喃月
 糸の遠く 遠くまろり 夢 涯
 糸老と 糸のちろり 裕 又 酬
 夕時まろり 人まろり 止んで 里のまろり 里 生
 阿のまろり 糸のまろり 糸のまろり 糸 糸
 月見れいと 糸のまろり 糸のまろり 糸 糸
 糸のまろり 糸のまろり 糸のまろり 糸 糸
 梅里

不足なき才もよくまよふ侍れり
 二重浪のなみりく やりて子守
 風早さあつたふ志正秋をいこま
 ぞくあつたふ風あり、反望表
 果不向て唄ふくもや枇杷の是
 翠香まき、さきとちりや、木の香
 明くを窓へる様のおきくつれ
 花よふれなまきを秋のうきらま
 柱音 一 泉 米 竹 子 壺 左 魁 居

出来秋々前の籠りの種のをき
 去年より入むらりのたき花んうり
 生香 香雪

安房歌

如月の空と定めんいりまき
 つくし事の一志きりしそあれ空
 疎さめて花よたなきむららえ
 足さすやまきく義の後ろけ
 流すくやあつたの澄のくもるそり
 定年 枇杷里 魚日 百拙 一 經

三三

光陰ハ矢の如く逝く 魂糸の
 水糸にせぬ糸の末に 秋の光
 山めく 谷へ入る 入る
 谷をくぐる 谷のゆく 山の月
 舟とてあそび 送る 遠く
 台ちや 谷の末に 瓜
 少川ぬく 目の遠き 桐一葉
 水糸を 谷の末に 瓜
 杞 清

竹の 葉の 秋の 條
 冬木 立 葉の 末に 瓜
 谷の 末に 葉の 末に 瓜
 田井戸の 末に 葉の 末に 瓜
 ありて 根の 末に 葉の 末に 瓜
 竹の 葉の 末に 葉の 末に 瓜
 入るの 末に 葉の 末に 瓜
 只一 月 行 入 淋 雨 田の 末に 瓜
 葉 田

若木のふくたうらうらうのうらうらう
 一 雁
 空と出でぬる月のまらふ
 憲 章
 ちる美草ちるぬふふふふふ
 梧 周
 おちぬやうふてちの来ていらく
 方 竹
 ちるそよよに湯きぬまらす
 江 風
 山に根をふよくらきききき
 梅 樹
 空探しよきききききき
 空 曉
 茶の戸てやうかふ先をふふ
 茶 耶

春の空月よよやをては音り
 烟 林
 冬をふふや横うら月のまら
 木 亭
 中一秋や返しそいんる学
 府 旌
 借りて秋の悔つふふふふ
 李 曉
 理や消くふつゆいふの石を
 石 鼓
 ちるぬるのふのうらやちる梅
 茶 堂
 梅と空ふふふふふふふ
 嘉 悦
 冬よ音のうらふふふふふ
 飛 山

万々とまら 餅やまら 液
 空とや 志を衣もまら 今 清月
 如急や 不々々 女杜 春山
 雪をよまら 柱で月と膏 深丸
 膝高や 遠山 澄月 澄
 火つらぬ 舟探々 丁乞 蘇江
 雪をよまら 舟のかき 放 益文
 起こす 舟を家マ 湖路

糸鞆の 不々々 白き 是まこれ 介石
 ちんちん 是のり 教をかき 玉隆
 近よれ 白い 舟の形 舟素
 是より 人のこま 今も後 東海
 舟と 顔の 並ぶ 堂友や 生才 疏旌
 船高の 舟り 灯や 舟 月枝
 雪す 舟の 根よ 舟つら 女 豊山
 今 越よ 舟の 舟つら 舟 碓月

千層の葉はまじりて水は清き
 今添て何れをたれは梅の影
 洲の影はこゝろをわく火
 川の流れは帆えゆる船の中
 ちりこゝろを枝の遠き梅の影
 住人の心はなをて喜ぶるれ
 片まれの先はあつちり今うれ
 眺まへてあつちりやうと月のはら

清風
 其桂
 玉光
 梅泉
 宇松
 岸高
 梅庭
 春高

君の代で母をいふは梅の影
 やまの門を入にきくの句はれ
 強留のれは尾をふかぬる
 是のちるふちを公と名うては
 山笑ふこゝろをよむ海のはら
 ちりけの是のり入の影はれ
 葉梅のつらみ水の影はれ
 や積る雪よかまを思ふ跡

又海
 英係
 玉山
 江高
 如雪
 梅年
 系姓
 赤泉

秋々涼し高のこゑきて高の中
 川茂川の舟通しきり喜々笑
 雲おろくや雲の中より子の手
 送達やちいさな福のちやうど
 子放しつりの袖よきそい喜々
 人の長ふ膝よぬのおうねり
 一里んよ夕日けち梅の如
 一し積る雪や海つらりのくま

中 高
 家 山
 枕 石
 又 池
 春 泊
 松 志
 危 水
 一 礎

只阿ふ力足るなり喜の詞
 柿の本え破むしよよさくら
 是よ高きよれよの空に如りぬ
 黄香のぬきとちあるまら喜々
 都へ来る風のぬきとち喜々
 傘たぶらぬまよそぬきとち喜々
 永き松のたぶらぬきとち喜々
 秋の空をりは高きよれ人よとち

鬼 宜
 白 道
 昇 經
 李 月
 山 風
 名 石
 桂 月
 尺 権

かくせ多き角力とたよ動きまゝ
 下ふ瀧のうらみわのきくこゝろ
 魚市の中よ文とや、夜かゝり
 秋の明くかゝり梅のうらみまゝ
 おくわる少き日らゝく池のあ
 むつまき中ととらんやひまのま
 月の生て移るるわたり言燈籠
 葉友 昇山 去灰 葉旌 其柱 之柱 柳 碓

二十 照福院詣 元亥居士

獨りよハ甚糸とまゝ涙しうら
 海苔の白ひの流るあか子 柔由
 芥子一ひ就庭へくち河まを 雲香
 心くちな小桶のこらけ出まゝ 奏足
 降さる月よふやらまをまゝ 延舟
 心くちな小桶のこらけ出まゝ 介石

香の葉様の中 松よまか〜 雪 古

部よいまねま 主の魚 類 香

山〜ま〜ちよ 殊数〜茶せん 類 由

涼〜ま〜多の 是てつ 中 年

味井よま〜車 の 無ひ〜ふ 是

部よ〜 庭の 富 札 古

二十日 五〜ま〜 暎〜ぬ 月代よ 香 高

けつ〜そり 飯のま〜ま〜 由

静〜ま〜角力の 夢話と 類ま〜ま〜 石

能〜ま〜 柏の 蘇〜斗り 札 只

辻〜ま〜 言〜ま〜 通〜ま〜 是の け 白 庭

伊勢路に 命を 命〜り 何〜 由

能〜ま〜 のま〜 上〜ま〜 何〜 白 遠

二〜ま〜 九〜ま〜 二〜ま〜 折〜ま〜 是

腕先を 尾〜ま〜 馬〜ま〜 札〜ま〜 香

玉の 光り ぬ 八〜ま〜 ち〜ま〜 高

おそるききりいりまて忘るれん
 烟草帯少てちる之志や
 割河まる更原ふ急人の集り流
 荻も苦くう平る堰流へ
 啼たきる月の阿やの音まよふ
 不きまのまねぬ細帯
 杉板も新流ふくは澄りよき
 子きりり月め流る実実

手 石 肉 店 是 遠 香 年

忘るるころ又旅とち出
 様の芳れを酒てまきり
 小るりなれそ自教人極く
 安優流て碇ちのゆり聲
 黄多や只是よ川法の壽
 心まへ伸きりりりあの阿
 旅の心もあはれりりりり

石 肉 富 是 亥 元 旅

老翁七田の願をよみし

横	見	車	に	ま	よ	う	お	く	時	も	、	の	水
明	不	り	、	山	を	く	、	雪	の	へ	口	う	を
惜	ふ	ま	う	、	い	つ	、	の	雲	よ	志	を	ぬ
水	き	り	の	夕	や	、	古	中	松	茂	あ	ら	る
肩	を	う	、	ま	子	を	呼	ぶ	、	夕	は	く	も
月	代	よ	、	中	を	く	南	を	さ	る	、	云	は
縁	あり	、	猫	の	り	、	葉	を	ま	る	の	月	

楓 居
 雪 香
 身 書
 之 霜
 雪 書
 白 鹿
 琴 是

ふ	い	と	出	て	、	ま	の	月	板	よ	振	を	り
松	風	を	才	よ	志	を	心	を	い	ぢ	う	う	り
見	え	又	信	を	ね	て	ま	の	ま	に	時		
歳	は	あ	、	伊	達	の	歌	を	橋	を	り	ら	
只	淋	、	子	路	の	秋	又	目	の	あ	ら	る	
悪	文	不	生	信	よ	信	、	ま	の	ま	に	時	
と	夢	の	め	く	、	う	ち	ま	、	ま	の	ま	に

乙 亥
 又 表
 叟 山

七田のふ出の信のぬきよ光陰に矢の

如くもあしらのやんまゝく父の好

道とてふ四方の法風はよむを乞ふ

らせを法舎の牌あまを

月やとてまや七やせの意と産 元 修

松き予は号を松りし時

新ふまの月松の取 兼 由

松の淋りてはようの子のありかへ

松の淋りてはようの子のありかへ

追加

野を越て道の細やう茂りし水 一 高

雪の白ぬけて去るや月松の 又 舎

足尾半ハ雪とやうく夕やうり 芳 節

志やもやうのそと松根のゆり 志 魁

木わく道のほを糸うち出流り水 房 丸

まらりやうきやう砂や冬の月 房 樹

長不をの流連て居るく角田川
 一を一の夜とや想てきり
 川哉とる居る方て、秋の是
 うも去くつて是即とふ如く
 留とよの空とくくくかき
 七之勢の侍消て急明
 よ一切や川魚くまき初めせん
 さらけし西月後よきく
 半 碓
 塘 高
 五 園
 糸 吳
 吾 由
 樵 山
 程 白
 志 在

山くけのーり家あくく三の月
 みるくぬまの又是をてあま
 人くけの是を淋くき移舟く
 不きまのづて失くく春く
 おとありまをい梅より之進
 小名も指録くくく重の
 おくまのくくくくく梅の月
 戸口まてまのくくくくく
 晴 白
 魚 眼
 鰯 旭
 志 園
 松 表
 樵 谷
 休 夫
 都 松

